

J Aうらほろ（林常行組合長、正組合員265人）の通常総会が7日、町内の農業会館で開かれた。2020年度の農畜産物取扱高は、過去最高だった19年度（115億5500万円）に比べて14.9%増の132億7400万円となり、最高額を更新した。好調な畜産事業が全体の数字を押し上げた。

農産物取扱高は前年度比1.3%増の53億6900万円（経営所得安定対策交付金を含む）。豆類は大豆が前年を上回る作付面積、収量を確保したが、小豆や金時類で8月の高温、収穫時の降雨などによる品質低下、価格下落といった影響が生じた。それでも、作物全体を通じて平年並みもしくはそれ以上の収量を確保した。

生乳生産量は同27.9%増の4万7049トン、生乳取扱高は同29.4%増の49億4500万円（生乳補給金を含む）と数字を伸ばした。1番牧草など粗飼料の収穫が天候に恵まれて順調に進んだことが背景にあり、畜産取扱高は同

26.4%増の79億400万円に上った。

新型コロナ禍でも当期純利益は5600万円を確保。当期末処分剰余金は1億3000万円で、0.5%の出資配当を予定する。

書面による議決権行使の186人を含めて197人が出席。林組合長は「組合員の営農努力の積み重ねで、過去最高だった19年度をさらに上回る取扱高を確保でき、5カ年計画で目標とする120億円の実現を2年前倒して達成した。今年度も5カ年計画を基軸に各種事業を展開したい」とあいさつした。

J A上士幌町（小椋茂敏組合長、組合員197人）の通常総会が9日、同J Aで開かれた。2020年度の農畜産物販売高は生乳生産の伸びや畜産関連での個体販売の頭数増などにより、前年度比で6.1%、14億1,900万円増の248億6,100万円（各種交付金含む）と過去最高になった。

総会は新型コロナウイルス感染防止のため書面議決を中心に開催し、書面議決157人を含む167人が出席した。

畜産の生乳生産量は規模拡大による増頭などで7,067トン増の12万6,645トン、金額で9億8,900万円増の132億4,000万円だった。畜産全体では12億4,400万円増の211億6,300万円。

農産物は、ジャガイモが平年並み、大豆や小豆は平年作以上だった。価格は消費低迷で下落したが、農産物の

販売高は前年度比5%増の36億9,800万円。

決算では経常利益3億875万円、当期末処分剰余金3億2,376万円を計上した。

小椋組合長は総会で「コロナ禍の影響で小豆や枝肉価格は下落したが、生乳生産は順調に伸びた。輪作体系の確立、耕畜連携の推進、消化液の効率的な活用などに取り組んでいきたい」とあいさつした。

J Aおとふけ（笠井安弘組合長、総代250人、正組合員1,120人）の通常総代会が9日、同J A事務所で開かれた。2020年度の農業総生産額（交付金、共済金含む）は、前年度比0.4%減の238億円。17年度（246億円）、19年度（239億円）に次ぐ過去3番目の高水準で、6年連続200億円を突破した。

農産物の販売額は、ジャガイモが平年を下回る収量となったが、小麦、ビート、豆類は平年以上の収量を確保し、22%増の122億円を記録。

青果はコロナ禍の中で生協向けの販売が堅調に推移し、5%増の32億円。

畜産事業では、良質な粗飼料の確保が個体乳量の増加につながり、生乳の取扱額は48億900万円（生産量4万7,278トン）と過去最高を記録。個体販売は乳用牛が9億800万円（計画比24%増）、肉用牛が12億8,800万円（同

10%増）。

経常利益は4億9,251万円で、当期剰余金は経費削減が奏効し計画（2億1,200万円）を上回る4億1,100万円を計上した。

総代会には総代250人のうち書面を中心に240人が出席。笠井組合長は「第8次中長期総合計画後期5カ年計画は4年目を迎えた。今年度も農地基盤の強化など八つの基本方針を軸に事業の推進を図る」とあいさつした。